

校長・学校長・絶好調

先日11月13日に、3年生を対象にした主権者教育を実施しました。これは新潟市の主権者教育推進プログラムを活用した取組です。

当日は、10人の新潟市議会議員の皆さんをお招きし、まず、生徒代表が議長・市長・質問者の議員役を演じての模擬市議会ロールプレイング。続いて、2クラスずつ3グループに分かれて、生徒からの様々な質問に議員の皆さんから回答していただく意見交換会。という内容でした。

この取組の目的は、近い将来に選挙権が与えられる中学生に、政治や選挙をもっと身近なものとして興味・関心を高くもってほしいということ。もう一つは、益々一人一人の価値観やものの考え方が多様化する時代にあって、正解が一つに定まらない問題に対する「合意形成」・「意思決定」の方法やプロセスを学んでほしいということでした。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

実は、私の祖父と父も町会議員（旧村時代は村会議員）をしていました。祖父は、昭和30～40年代頃、特に、近くの自衛隊百里基地（茨城県・現小美玉町）からひっきりなしに発着するジェット機の騒音問題に力を注ぎ、小中学校を防音校舎にすることに奔走するなど、いろいろな人の相談ごとに真摯に対応し、最後は副議長を務めました。そんな私心なく汗を流す祖父を、子どもながらに誇らしく思ったものです。

そして、祖父の現役時代の、特に選挙活動でのドタバタを忌み嫌っていたとばかり思っていた父親が、祖父が亡くなって数年後に選挙に出ると言い出した時には、しばし落ち着いた日常生活に安堵していた身内の誰もが、あっけにとられました。「本人の人生だから仕方ない」「好きにさせよう」と冷めた眼で眺めつつ、立候補を寛容に容認したものです。祖父以上に長い在任期間で町会議長も務めた父でした。

よって、私にとって、もの心ついた時から選挙や政治は身近なもの、というより家庭にどっぷり浸った代物だったのです。家にはことあるごとにいろんな人が出入りしていました。特に選挙ともなると、幼い時分は、開票日夜には兄弟全員が近所の家に預けられ大人たちの喧騒からあえて遠ざけられ、逆に大学生の頃は、選挙カーに乗せられ、ウグイス嬢ならぬウグイス息子として父親の名前を連呼させられ選挙活動を手伝わされたものです。

まさに、田舎の村社会での「ドブ板」「駆け引き」「打算」「裏切り」「義理と人情」「血縁・地縁」が交錯し、公言できない人間の醜い部分や嫌な場面もたくさん見てきました。

幸い？祖父も父も落選することはありませんでしたが、当選して、ここぞとばかりにすり寄ってくる人間や、いろんな注文や要望を持ち込んでくる人もたくさん見てきました。

一方で、かつて自民党副総裁だった大野伴睦が「サルは木から落ちても猿だが、政治家は落選したらタダの人」と語ったように、落選すれば、当事者にとっては人生最大の挫折や敗北の類でしょう。そして、同時に、その人間サイドに立っていた周囲の人の対応も時に大きく変わるものです。その人の元から去る人、大きく距離をとる人、一切関わらなくなる人。それは、その人への失望や価値観の相違に気付いての場合もあるでしょうが、それも含めた自分なりの損得勘定や打算が働いている場合が多いと思われます。しかし、当事者からすれば、それは大いに悲しむべきことかということ、一概にそうとも言えません。なぜなら、自分のことを本当に理解してくれる真の味方が鮮明になり、本質が見えてくるからです。

全校で同じ目標を共有する学校生活においては、子どもたちには、つらいことで悩み苦しんでいる人間がいるならば、それだからこそ意識してそういった人間の心に深く寄り添える人間になってほしいものです。そういう人こそ、真の友人に値する人間です。もちろん先生方にとっては当たり前の責務です。

私は、子どもたちには、誰とでも「同じ距離」をとってほしい、どんな友達とも「同じ熱量」で接してほしい、とは望んでいません。職員間の人間関係においても然りです。子どもだって大人だって、気の合う人間もいればそうでない人間もいます。それは仕方のないことです。ただ、誰にでも「公正・公平」で「人の痛みが分かる」人間ではあるべきです。

そして、一般社会では、自分が望む望まないにかかわらず、自分が気の合わない人間や主義・主張の異なる人間と接する機会や必要性がより多くなるのも事実です。

決して表面上の好き嫌いにとらわれずに、どんな人間とも、冷静なコミュニケーションをとって、目の前の諸課題に「合意形成」や「意思決定」が図ることのできる力を身に付けてほしいと願うのです。それこそが民主主義の根幹です。

トランプやプーチンや習近平などだけが権力者ではありません。間接的であっても、国を統治し世の中を動かす権力は、皆さん一人一人に与えられているのです。それが「主権」の意味するところです。

また、中華人民共和国の主席だった鄧小平は、「黒い猫でも白い猫でも、ネズミを捕るのが良い猫だ」との格言を残しました。政治家も教育関係者も、高い指導力や能力を発揮し輝かしい成果や実績をあげることが最優先ですが、品性や人間性などはどうでもというわけにもいかないはずで

す。世の中には聖人君子ばかりではないですし、私は他人のことをとやかく言える立派な人間ではありませんが、とにかく「先生」などと呼ばれる方々や、ちょっと職務上の肩書が上になったり社会的な立ち位置が上がって「〇〇長」なんて呼ばれるようになると、突如上から目線で急にえらそうにする人間が多いものです。勘違いしている方がかなりいます。実際、時々私が中学校の校長だとわかると、いまだに「すごいですねえ」と言われることがたまにあります。何がすごいのか全く意味が理解できませんし、決して言われて嬉しいと感じたこともありません。

当時、町会議員に初当選した父に、貴重な自分の一票を投じた一選挙民の立場として一つだけ注文しました。「有頂天になって、調子こいて、えらそうな振る舞いやえらぶった態度をとったら二度と応援しないんで。とりあえず、じいちゃんを超えてくれ」と。

毎朝登校時に、玄関前の通学路でいつも元気よく挨拶してくれる生徒がいます。

「おはようございます、校長先生。今朝も校長先生に媚びを売りにきました」そして「校長、学校長、絶好調」。いつでもどこでも、常に“横から目線”の愛すべきA君は、私の立ち位置の最大の理解者です。